



精密診断結果（上北沢桜並木） 平成28年9月30日

N.○	H 27 腐朽率	今回 腐朽率	判定	所 見	今後の 方針
2	35	47	B 2	幹：コフキタケ 倒木危険度は、やや高い。風圧軽減剪定が必要。	軽減剪定
9		58	C	幹の芯材から辺材部に貫通し閾値50%を超える極めて大きな異常が認められた。数値的には倒木または幹折損の危険度が高く、植替え検討を要す樹木である。存置する期間が長い場合は、風圧軽減剪定が必要である。	軽減剪定
10		37	B 2	打音異常（大） 繼続観察を要す。	
11		21	B 1	根元：マンネンタケ 繼続観察を要す。	
13		49	B 2	根：コフキタケ 倒木危険度が高く、植替え検討を要す。	軽減剪定
18		23	B 1	根元：マンネンタケ 繼続観察を要す。	
19	41	58	C	根元の芯材から辺材部に貫通し閾値50%を超える極めて大きな異常が認められた。数値的には倒木危険度が高く、植替え検討を要す樹木である。存置する期間が長い場合は、風圧軽減剪定が必要である。	軽減剪定
20	50	56	C	根元の芯材から辺材部に貫通し閾値50%を超える極めて大きな異常が認められた。前回診断時より腐朽空洞率は大きくなつており、倒木危険度が高く植替え検討を要す樹木である。存置する期間が長い場合は、風圧軽減剪定が必要である。	軽減剪定
21	24	31	B 2	根元：マンネンタケ 繼続観察を要す。	
25	44	47	B 2	根元腐朽 幹：カワウソタケ 風圧軽減剪定が必要。	
26		36	B 2	風圧軽減剪定が必要。	軽減剪定
27	34	52	C	幹の辺材から芯材にかけて閾値50%を超える極めて大きな異常が認められた。前回診断時より数値は著しく大きくなつており、倒木または幹折損の危険度が高い樹木である。数値的には植替え検討を要す樹木であるが、存置する期間が長い場合は風圧軽減剪定が必要である。	軽減剪定 胴巻き実施
28		53	C	幹の芯材から辺材部にかけて、閾値50%を超える極めて大きな異常が認められた。倒木または幹折損の危険度が高く植替え検討を要す樹木である。存置する期間が長い場合は、風圧軽減剪定を行う必要がある。	軽減剪定
30	6	11	B 1	枝：コフキタケ 繼続観察を要す。	
32	58	66	C	根元の芯材から辺材部にかけて閾値50%を超える極めて大きな異常が認められた。前回診断時より数値は著しく大きくなつており、倒木危険度が高い樹木である。数値的には植替え検討を要す樹木であるが、存置する期間が長い場合は風圧軽減剪定が必要である。	伐採・ 植え替え
36		54	C	根元の辺材から芯材にかけて閾値50%を超える極めて大きな異常が認められた。数値的には倒木危険度が高く、植替え検討を要す樹木である。存置する期間が長い場合は、風圧軽減剪定を行う必要がある。	軽減剪定
37		30	B 2	枝：カワウソタケ、根元：ベッコウタケ 繼続観察を要す。	
38		35	B 2	継続観察を要す。	
43	63	65	C	幹の芯材から辺材部に広がり、閾値50%を超える極めて大きな異常が認められた。腐朽空洞率は前回診断時とほぼ同じであるが、数値的には倒木または幹折損の危険度が高く、植替え検討を要す樹木である。存置する期間が長い場合は、風圧軽減剪定を行う必要がある。	伐採・ 植え替え
44	26	35	B 2	継続観察を要す。	
45		49	B 2	倒木危険度が高く、植替え検討を要す。	軽減剪定
48	59	63	C	根元の芯材から辺材部に広がり閾値50%を超える極めて大きな異常が認められた。前回診断時より腐朽空洞率は大きくなつており、数値的には倒木危険度が高く、植替え検討を要す樹木である。存置する期間が長い場合は、風圧軽減剪定が必要である。	軽減剪定
49	52	65	C	根元の芯材から辺材部に広がり閾値50%を超える極めて大きな異常が認められた。前回診断時より腐朽空洞率は大きくなつており、数値的には倒木危険度が高く、植替え検討を要す樹木である。存置する期間が長い場合は、風圧軽減剪定が必要である。	軽減剪定
50	64	68	C	根元の芯材から辺材部に広がり閾値50%を超える極めて大きな異常が認められた。前回診断時より腐朽空洞率は大きくなつており、数値的には倒木危険度が高く、植替え検討を要す樹木である。存置する期間が長い場合は、風圧軽減剪定が必要である。	伐採・ 植え替え

B 1 =注意すべき被害（3本）

B 2 =著しい被害（10本）

C=不健全（11本）

（全46本中）